

批判力の前に 身につけさせるべき力

代々木ゼミナール小論文講師

熊谷 壽承

小論文では、筆者の意見に批判を加えることを通じて自説の独自性を出すというのが一つの指導法として挙がっています。しかし、大家である課題文の筆者に果たして有効な批判はできるのでしょうか。むしろ受験生が思いつくような批判は織り込み済みで、あえてそういう主張をしていると考えた方が妥当ではないか。筆者批判の前に、筆者の「あえて」を探るにはどうしたら良いか、現代という視点から掘り下げることの必要性を述べてみました。

1. 筆者への反論は成功するのか？

(1) 筆者の意図を疑ってみる

小論文の指導法の一つに、課題文の主題を把握し、筆者の主張に反論などを試みつつ、自説をしっかりと主張し最後はすっきりとまとめていくものがあります。市販の参考書にもそういうことは書いてありますし、かつて私もそういう小論文の指導を受けた記憶があります。

しかし、私は以前より「筆者の主張に反論を試みつつ」という点に、少なからず疑問を抱いておりました。筆者への反論など、受験生がそもそもできるのか、と考えるからです。課題文の書き手は当代一流の学者や評論家の手になるものです。一部の例外を除けば、そのテーマについて、長年にわたって研究を重ね、熟慮したうえで書かれているのが一般でしょう。それを初めて読んだ受験生がわずかな時間で、有効に反論できるのか、という疑問です。けっして受験生を馬鹿にするわけではありませんが、両者の実力差は認めねばなりません。筆者への批判は見当違いの、あるいは問題の本質を外した、枝葉末節への批判に終わったりするケースが多いのが現状です。

たしかに読んでいておかしいと感じる文章はあります。批判しようと思えばできないことはないかもしれませんが。しかしそういう場合でも、その前になぜそのような意見を言おうとしているのか、より深く慎重に考えてみるべきではないか、と受講生に話をします。君たちが気付いた問題点を、愚かにも筆者は気付かなかっただろうか、いや、気付いたうえで、あえてこのような議論をしているのではないだろうか、と考えるべきだと指摘をします。

これは単に反論に失敗するからやめておいた方がいいということではありません。そのように考えるほうが、より深い筆者の理解に繋がると思うからです。「なぜ筆者はこのように議論しているのだろう、普通に考えてもおかしいではないか」と思ったら、発想を変えて、「では筆者は普通には考えていないのかもしれない、普通ではなく、別の視点から考えて、この結論に達したのかもしれない」と考えること、そして別の視点というものがどういうものなのかを考えてみるのが、結局は筆者の視点へのより深い理解に繋がるのだと私は考えるわけです。

(2) 何が問題なのか

たとえばもうだいぶ昔の問題ですが、小学校4年生の児童たちに、実際に生きたニワトリを解体させて、その肉を食べるという授業をした教師の手記が出題されたことがあります。有名な問題ですから、ご存知の方も多いかもかもしれません。休日の午前中、とある公立小の校外活動の一環としてそれは行われました。遠足気分で児童たちは稲刈りをしたり、水遊びに興じたりしますが、実は朝から何も食べさせてもらえません。空腹が頂点に達した頃に、やおら引率の教師は児童に、これからニワトリを解体し、その肉でスープを作って食べます、と宣言するのです。子供も付き添う父兄も驚き、さっきまで一緒に遊んでいたニワトリを解体することなどできないと泣き出す子も出てくるのですが、教師は容赦しません。20羽以上もいるニワトリを生きたまま絞めて、肉にしてしまうのです。子供自身に絞めさせたりもしました。20羽以上もニワトリをいきなり絞めて、首を切り、血を抜くのですから、あたりはさぞ凄惨な場面になったことだと思います。しかし、泣き叫んでいた子も、空腹には耐えられず、結局はおいしい匂いのするスープを口にしてしまうのです。

これを読んでこの授業をどう思うか、賛否を明確にせよ、というのが問題でしたが、受講生はこの授業に批判的です。肯定派は、食べ物はずべて元は命を持っていたのであって、その命の尊さをこの授業を通じて理解させようとしたのだ、と主張しますが、否定派は、こんな残酷な方法を取って、トラウマになってしまったら、命の重要性など感じられないはずだ、むしろ生命の過酷さに怯えて、生命そのものを何か恐ろしいもののように感じてしまうかもしれない、と主張しました。

しかし私は、ではこの引率教師はそんなことも考えずに、ニワトリ解体をやったのか、と問います。随分軽率な教師だということになるが、どうだろうかと問いますと、そういわれればたしかに軽率すぎると誰もが感じるようです。軽率な大人を批判させるためにわざわざこの問題が出されたのではなく、ある意味確信犯的にこのような授業をした教師の行為を問題にしていたのだとするならば、それはどういう理由からなのか、さらに掘り下げて考える必要がでてくるはずですが（ちなみに、肯定派にも問題提起します。反対派のいうようなことは君たちも思いつくはずですが。にもかかわらずやったのは、食への感謝のためだけなのか。食への感謝のためだけに、20羽のニワトリを殺す必要があったのか、トラウマになるかもしれない子供のことなどはやはり忘れていたのか。すると肯定派も自信なさそうに首をふります）。

(3) 筆者の意図は、課題文からしか読み取れない

ここで、単に頭を思いめぐらしているだけではだめで、改めて課題文を読み返し、ヒントを探さなくてはいけないのだと注意します。課題文にしか筆者の考えは書かれていないからです。そこで本文を熟読させると、この教師は徹底して児童を管理、コントロールしていることに気付く者が出てきます。朝から何も食べさせない、稲刈りや水遊びで空腹をさらに高めさせる、嫌がる子供たちに、眼を逸らすなど命令する、そして最後はおいしいスープを眼前に用意する。どれ一つとっても、子供たちにスープを飲まないという選択をさせないものです。そこから、この教師の独善性を論じることが可能ですが、それでもなおこの教師の行為の意味を探っていくと、児童が小学校4年だという点に着眼する者も出てきます。4年生といえば、ある程度自我の萌芽はあるが、なお親や教師の価値観に感化される年齢であり、何かを学ばせるためには、このような管理コントロールは必要なのだとこの教師は判断したのではないかと考えたりします。食への感謝は大切なことだ、しかし自発的に理解させるよりも、大人による「教育」としてある程度強制の契機があってもいいから、このような方法を取ったのではないか、ということです(エリクソンの発達段階論では小学校4年生はそのような時期ではないのですが、そういう修正はしません。大切なのは知識的正確さではないからです)。

2. 現代という視点

(1) 小論文は現代を問う科目

さきほどよりは少し掘り下げられたようです。しかしまだまだ浅いと私は思います。いくら強制の契機が求められるとはいえ、やはりこのような方法は問題があるのではないかという意見もありうるからです。実際にはここらあたりで時間切れ、来週までの宿題ということになるのですが、授業後、講師室にやってきて、なんとかヒントをもらおうとくらいついてくる者もいます。そういう受講生には「現代の基本理念は何か？」と逆に問います。これは、じつは私の講義のお約束で、分からなくなったら現代社会が求めているものは何か、その基本理念は何かを考えてみる必要があると話しているのです。

そもそも小論文は「現代に対する視点を問う問題」だと私は理解しています。大学自体が現代を問い、より良いものにしていこうとする学府である以上、これは当然のことです。法学部は法から現代社会を問い、医学部は医療から現代の新しい可能性を模索しようとしているはずです。考古学や歴史学を現代とは無縁の古（いにしえ）を知るだけの学問であるとしたら、歴史学の基礎的理解を疑われてしまいます。

そこで、私は一年の授業の冒頭で小論文が現代を問うているものだということ、それゆえ、現代とは何かをきちんと知ることが小論文の勉強には不可欠であることを指摘します。そして現代を理解するうえで重要な指標となるもの、「個人主義」「合理主義」「社会契約論 - 功利主義」「自由主義 - 民主主義」といったことについて（ほかにもまだまだありますが）、なるべく分かりやすくその功罪の解説をします。そして、そこから発想して何か考えることはできないかといいます。

(2) 「現代という視点」から問題を捉え直す

たとえば私が受講生に気付いてほしかった、もう一つの視点は、この教育が頭で覚えさせるものではなく、体で覚えさせるものであったということです。頭で理解させるのではなく、空腹という肉体的実感に訴えかけながら、食の持つ意味、あるいはもっと大きく、他の命を犠牲にしなければ自分の命を維持することができない生命の意味について考えさせようとしたのが、この授業の目的ではなかったのかということです。物事を合理的に捉え、抽象化し分析して理解するのではなく、血の迸るのを眼で見て、血の臭いを鼻で嗅いで、おいしい匂いに心がかき乱され、自分は残酷にも一緒に遊んだニワトリをこうして食べているのだ、という肉体的実感を強制的な契機の中で持たせるのが、この教育の目的であったのではないかという視点です。

これは、現代社会の持つ「合理性への懐疑」という視点から問題を捉えたアプローチです。物事を合理的に考え、分析し、体系化してしまうことが、かえって視野を狭めてしまうという、今日の私たちが獲得した一つの視点から、この教師が「あえて」このような実践教育を行った理由を浮彫にしたわけです。

もちろん、このような教育が妥当なものであったか否かはさらに問題になるでしょう。実際にこのような実習をすれば PTA で大問題になるかもしれません。

しかし、問題の所在はそのようなところにあるわけではありません。まずは、課題文の筆者がどういう意図でこのようなことを主張しているのか、その意味するところを「現代」という視点から徹底的に理解し、その課題文の全容を把握するところから始めるべきだということです。

(3) 深く理解しようとすることの難しさと大切さを 教える

「食への感謝の念があるにしても、こんな残酷な方法ではトラウマになってしまう」という批判は、この教師への批判としては表面的な批判です。例えば、身体的実感を通じた教育は、身体的実感に個人差があるがゆえに、かえって問題の正確な理解を妨げる、であるとか、身体的実感も最後には頭で理解することを通じて知性になるのであり、現代教育の目的は知性と感性のバランスが求められるが、この教育方法はどうか…というような批判が求められるようになるはずです。トラウマ云々の話はそこで初めて出せるものでしょう。

批判には、それをするだけの能力が必要です。その能力を磨くことも必要でしょう。しかしその前に、筆者を深く理解することが重要であり、それが進めば進むほど、批判は簡単にはできないことに皆さんは気付いてくれます。これが小論文指導の重要な視座ではないかと私は思っております。